



Title	神殿丘南麓発掘調査雑報
Author(s)	山崎, 保興
Citation	基督教学, 27, 27-30
Issue Date	1992-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46511
Type	other
File Information	27_27-30.pdf



神殿丘南麓発掘調査雑報

山崎保興

エルサレム旧市南東部に位置するいわゆる「神殿丘」周辺の発掘調査は、ヘブライ大学考古学研究所及びイスラエル発掘協会の共同事業として、斯界の権威ベニヤミン・マザール教授総指揮の下に、一九六八年から七七年にかけて実施された。筆者はこの間一九七五年秋の一期（九月末から十二月始めまで）直接現場作業に従事する機会を得たのであるが、そこでの見聞については翌年帰国後最初の本学会特別講演会においてスライド・写真等を用いて紹介したことがあったが、その後この事については一度も触れることなく今日まで過して来た。それというのも当時筆者が問題関心事としていた事柄に直接関連のある情報に乏しいように思われ（後で自らの怠慢を恥じることになるのであるが）、それよりもその後一九七八年に開始された「ダビデの町」の発掘調査の方に関

心を集中しており、本学会での数次の発表も専らこの「ダビデの町」に関する事柄に終始していた。

ここでいささか個人的消息に立ち入ることを許された。筆者は元来その年の夏に継続再開される予定となっていたテル・ゼロール発掘調査隊の一員として現地参加すべく当該発掘調査団長大畠清教授より指示を受け、それに先立って一九七五年三月末エルサレムに入り、当初ヘブライ語学習に専念した後、間もなく開始されたイーガエル・ヤディン教授の講筵に列しつつ、鋭意聖書考古学の入門的学習に自ら努めながら、ひたすら日本からの発掘隊の列来を待ち受けていた。過越祭の宵に始めてエルサルム入りしたものが、週の祭を過ぎても消息が無く、少しく不安の念にとらわれ始めていたある朝、突然宿舎の扉を叩いて後藤光一郎・石川耕一郎の両氏が現われ、身支度もそこそこに大畠教授の待つ市内のホテルに向ったのであった。そこで発掘計画の一時中止を告げられ、落胆しながらもその後の数日間は恩師・旧友と共にテル・ゼロール現地を始め諸所を訪れ、また現場に保存されていた資料整理を手伝うなど楽しい時を過すことが出来

たが、結局当該発掘調査計画は再現することなく、筆者も遂に幻の隊員として終ることとなるのはもつと後の話である。

長い夏休みの間は又ウルパン通いをしたり、各地の発掘現場を見て歩いたり（まさしくダンよりベエルシェバに至るまで）幾つかの博物館で終日過したりしていたが、ヤディン教授の講義が再開される冬学期開始までの間にどうしても実地体験をしておきたいとの思いに駆られて、春以来何くれとなくお世話になって来たヘブライ大学考古学研究所事務局長ヤコブ・アヴィラム氏に相談したところ、早速マザール教授の下で現場の発掘隊長を勤めるメイール・ベン・ドヴ氏に紹介され、直ちに翌日から現場に通うこととなった。連日早朝スコプス山上の宿舎を出、幾つか坂道を下り上りしてナブルス通りをダマスコ門に至り、更に旧市街を北から南に縦貫し、「嘆きの壁」を横目に見つつドゥン門を抜けて左折、城壁沿いに「南の壁」の現場に到着する頃、ちようどオリヴ山に朝日が昇って作業開始というこの日課は、現場の体験と共に往復の経路を少しづつ変えることによって得られる思わ

ぬ発見の楽しみと相俟って、予想以上に充実した日々を与えてくれた。テル・ゼロールを失った代りに、オペルが与えられたのである。

筆者が働いたのは正確には神殿丘周辺発掘調査計画第二十三区の、そのまた南東隅の一面、旧市城外を南辺から東辺に迂回する公用道路の真下に当り、時折路上を走る観光バスから声をかけられたり、一度は日本人巡礼団の貸切りバスがわざわざ止って車中に呼び込まれ、一場の現場解説を試みる破目になったこともある。とは言っても、その時点ではまだ正確なことは何も分っていないかったわけで、時折見廻りに来られるマザール教授のその都度の推測で、大体ヘロデの第二神殿時代末期、また当時筆者が単独で掘り出したつあった区画は、多分巡礼者のための公用宿舎ではないかとのことであったが、これは後日適中することとなる。事実筆者自身、ヘレニズム様式の食器や壺、燭台あるいは香水入れと思われる美しいガラス器等々の破片を取り出したが、残念ながら何らかの銘の刻印された物には一度も出会わなかった。神殿丘西南部、いわゆる「西の壁」の発掘現場からは、その

少し前に古いシェケルのかたまりが出て大騒ぎしたなどという話しも聞こえていただけに、いつも万一の大発見を期待したりもしたが、そのうちいつしか快晴また快晴の空に薄雲がかかり始め、十二月に入って間もない或日突然どしや降りとなり、その年の作業は中止となった。

三年後、前期「ダビデの町」発掘開始直後の現場に、こられたアヴィラム氏の紹介で発掘隊長イーガル・シロ教授を訪ねての帰途、懐かしい「南の壁」の現場に立ち寄って見たところ、心を残して出国した時にはまだ土中に埋っていた場所にきれいな玄関のポーチが現われており、思わず独り快哉を叫んだ。全体として大体作業終了の気配であったが、更に三年後に行った時には既に有刺鉄線で囲われ、更に九年後の一昨年夏訪れた現場は、一面に夏草に掩われ、幸い自ら担当した道路直下の部位だけのぞき見ることが出来た。実はこの時筆者はヤディーン教授が生前完結された「神殿写本」校訂本を入手すべく、折から湾岸紛争勃発直後のエルサレムに入ったのであるが、どうしても足は何処よりも先に南郊に向い、先づ「ダビデの町」へのスロープを下りかけた所で警備の兵士と

警官に押し止められ（昨今危険地域として立入禁止になったとのこと）、やむなく南の壁を眺めるだけで諦めたのであった。その足で都心部のイスラエル発掘協会を訪ね、今はその事務局長となっているアヴィラム氏と久々の再会、その時ベン・ドヴ氏の総括報告書を供与され、筆者がまだ一度も「南の壁」に関する報告を試みないまま今日に至っていることを知ってその怠慢を責められた。昨年七月に行った本学会での報告は専ら上記のベン・ドヴ報告の一部に拠ったものであるが、更にその後エン・ゲヴ発掘に赴く山我哲雄氏に依頼して外ならぬマザール教授の総括報告書を持ち帰っていた。一九七六年春、筆者は帰国に先立ってマザールの名著『主の山』を入手していたが、そこでは未だ第二十三区についての言及は（当然のことながら）まだ無い。前記報告書によって筆者は始めてあの「南の壁」発掘調査結果の全容を知り、それがベニヤミン・マザールの後継者エイラート・マザールによる第二次調査（一九八六七）を経て最終的に明らかにされたことを知ったのである。現場がかってオペルと呼ばれた地域に当ることは繰り返すまでもな

いが、全体として表層部はビザンチン時代、次層部位にヘロデ時代、最深部に第一神殿時代末期に属する構築物が現われている。そして筆者の担当した場所は、やはりヘロデ時代の公館、前記のポーチはずっと下ってビザンチン時代初期の巡礼用宿舎の入口であった。身边雑記に多くを費してはや制限紙数を超えてしまったので、より詳細な報告は別の機会に譲ることにしたい（これについては目下別途に準備中でもあるので）。以上学会報告の時とは著しく異なる内容の雑報となってしまったことをお許し願いたい。終りに、大畠教授を始めヤデーン教授・シロ教授、更に後藤氏まで既に故人となられたことを思い、往時を偲んで感無量のものがある。

(参考文献紹介)

Meir Ben-Dov, *In the Shadow of the Temple*.

1985, Jerusalem

Eilat Mazar and Benjamin Mazar, *Excavations in the South of the Temple Mount*, (Qedem 29)

1986, Jerusalem